

## Munkkiniemen yhteiskoulu 訪問②

安田学園中学校高等学校 グローバル教育推進室主任 根本 竜太郎

### 1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、2025 年 9 月 12 日、視察先である Munkkiniemen yhteiskoulu（中高一貫校）を訪問した。当初は中学部と高校部に分けて報告書を作成する予定であったが、実際の教育活動において両者の区別が明確ではなかったため、報告者それぞれの視点から①・②としてまとめることとした。見学した授業の内容や注目した点も異なるため、2つの報告を通して、多面的に視察校の教育の特色を感じ取っていただければ幸いである。

### 2 学校（施設）概要

#### 2.1 学校のある環境

学校のあるムンッキニエミ地区は、ヘルシンキ中心部の西側に位置し、海沿いの落ち着いた住宅地として知られている。周辺には公園や緑地が多く、歴史的に中流から上流層の居住地域として発展してきた。交通の便も良く、路面電車やバスで市中心部へのアクセスも容易である。このような環境は、学習に集中できる静かな住宅街の雰囲気と、都市的な利便性の両立を特徴としている。

#### 2.2 生徒数と教員数

生徒数は約 960 名で、中学相当の生徒が約 490 名、高校相当の生徒が約 470 名である。教員は 70 名、サポートスタッフが 23 名、カウンセラーが 3 名在籍している。

#### 2.3 公立と私立の違い

ヘルシンキには私立学校が多く存在する。公立との主な違いは、意思決定の自由度であり、私立では校内で迅速に実行できる体制が整っている。一方、公立校の場合は国から地方自治体を経由して通達が届くため、対応に時間がかかるという。なお、両者ともに国家の学習指導要領に基づいて教育を行っている点は共通している。教員の給与については、公立校では国から、私立校では運営財団（ファンデーション）から支払われる。給与水準はほぼ同程度であるが、私立校の方がやや良い傾向にあるという。

#### 2.4 コースについて

授業はレベル別に編成されており、「ショートコース（短く簡潔に学ぶ）」と「ロングコース（長く詳細に学ぶ）」がある。コース間の移動も可能だが、希望者は多

くないとのことである。

## 2.5 入試について

中学校段階では入試がなく、希望者は誰でも入学できる。一方、高校段階では入試が課される。中学からの内部進学者も全員が試験を受け、外部の学校へ進む生徒も一定数いる。

## 2.6 職員室について

職員室は、図 1・2 で示すように、集中して作業をするスペースと、コーヒーを飲みながらリラックスして作業をするスペースに区切られていた。

図 1 集中して作業する職員室



図 2 リラックスして作業する職員室



## 3 教育環境

フィンランドでは教育に関する費用の多くが無料である。生徒は紙の教科書やノート PC を購入せず、学校から貸与される仕組みになっている。ノート PC は校内で使用するが、自宅のパソコンを用いてオンライン上で作業を続けることが可能である。教科書に準拠したワークブックは生徒が書き込むため、無償で提供されている。以下で見学した授業について述べる。

### 3.1 中学 3 年生 英語 (English)

授業では、各生徒がノート PC のボックスから自分の端末を取り出して作業を始めた。与えられた課題に基づき、PowerPoint を用いたプレゼンテーション資料を作成する。45 分×3 コマで完成させる設定であった。以下は生徒が選択できるテーマの選択肢である。

表 1 生徒が選択できるテーマ

①	カリブ海または南アフリカの都市（人口・歴史・魅力・写真・訪問したい理由などを含む）
②	カリブ海または南アフリカの文化（映画・音楽・文学などの紹介と感想）
③	有名な人物（背景や業績をまとめる）

作業が終わった生徒は、教師へメールで提出する。授業は会話重視で、英語で進行される。中学では紙の教科書中心、高校ではデジタル教材中心となる（コスト面で安価なため）。文法はフィンランド語で指導されるが、語彙やリーディングはできるだけ英語で行う方針である。

英語の学習は通常 5～7 歳から始まる。他国と比較して授業時間数は多くない（例：トルコは週 10 コマ、フィンランドは週 3 コマ）が、生徒の自主性を重視し、生活の中で英語に触れる機会を多く設けている。例えば、フィンランドでは映画やドラマの吹き替えがなく、字幕で視聴することが一般的である。

学期に 2 回のテストがあり、結果には個人差が見られる。入試では一定の学力基準（足切り）が設けられているが、教育理念としては「自分に合ったレベルでストレスなく学ぶ」ことが重視されている。

### 3.2 高校 3 年生 歴史 (History)

授業テーマは冬戦争 (1939-1940) であった。授業冒頭では 20 分間の映像を視聴し、その間、生徒全員が PC を閉じて静かに集中していた。その後、教師が映像中の重要語句を確認し、解説を行った。教師は自分の祖父の写真を示しながら話を進め、生徒の関心を引いていた。

続いて、時系列を整理したプリントが配布され、生徒は個人でもグループでも作業を進められる形式であった。ここから PC の使用が許可され、調べ学習を取り入れる姿勢が見られた。

### 3.3 高校 2 年生 物理 (Physics)

授業では、ジャンプを題材にした実験を行い、装置を用いて得られた波形から力の働きを説明していた。高校段階ではデジタル教材が主流との説明であったが、この授業では紙の教科書とノートが中心で、実験や記録を重視した構成であった。

## 4 おわりに

OECD のデータ<sup>1</sup>によると、フィンランドの教育支出は対 GDP 比でおおむね 6.5%前後、日本は約 3.5%前後 となっており、フィンランドの方が教育支出の比率が高い傾向にある。また、国家予算（政府支出）に占める教育支出の比率も、フィンランド<sup>2</sup>は約 10%前後、日本<sup>3</sup>は 7～8%程度 と報告されており、絶対額だ

---

<sup>1</sup> [https://www.theglobaleconomy.com/rankings/education\\_spending/OECD/](https://www.theglobaleconomy.com/rankings/education_spending/OECD/)

<sup>2</sup> <https://tradingeconomics.com/finland/public-spending-on-education-total-percent-of-government-expenditure-wb-data.html>

<sup>3</sup> [https://www.theglobaleconomy.com/Japan/Education\\_spending\\_percent\\_of\\_government\\_spending/](https://www.theglobaleconomy.com/Japan/Education_spending_percent_of_government_spending/)

けでなく、政府支出の中で教育が占める重要性もフィンランドの方が大きいと言える。

もちろん、フィンランドと日本では公立・私立の在り方や制度上の違い、地理的・教育的環境などが異なるため、単純な比較はできない。また、フィンランドの良い点をそのまま日本に取り入れることは容易ではない。しかし、視察で感じたのは、まずやってみるという姿勢が非常に強いことである。たとえば、校内でのスマホ利用についても法律で規定し、ICT教育に偏りすぎた場合は紙教材に戻すなど、試行錯誤を通じて柔軟に調整していた点が印象的である。

日本ではICT教育を推進する場合でも、バランス感覚を重視するため、極端に偏ることは少ないと思われる。一方、フィンランドの教育現場では、生徒だけでなく教員のウェルビーイングも重視しており、この考え方は日本でも比較的容易に取り入れられる可能性があると感じた。

本視察の実施にあたり、ご支援とご協力を賜った関係各位に深く感謝する。特に、私学財団の皆様をはじめ、フィンランドの教育関係者の方々には多大なご厚意をいただき、厚く御礼申し上げます。本視察で得た知見を、今後の教育活動に活かしていきたい。

参考：

□ Munkkiniemen yhteiskoulu. (n.d.). *Munkkiniemen yhteiskoulu*. Retrieved October 13, 2025, from <https://www.munkka.fi/>